

原発報道の読者評価 東京新聞記者が講演

山田健太ゼミの調査も発表



▲講師の加古陽治氏と山田健太教授

シンポジウム「震災・原発事故から2年 原発をどう報じるか」(自由人権協会主催)が3月1日、神田キャンパスで開かれ、東京新聞文化部長で原発取材班の前総括デスク、加古陽治氏が講演した。コーディネーターは同協会理事の山田健太文学部教授。人文・ジャーナリズム学科の山田ゼミ生が司会を務めたほか、研究発表も行なった。東京新聞は、福島第一 池田賞が授与された。原発事故がなぜ起きたのかを調査報道(「連載レベル7」など)で探り、「本当のことを知りた」と欲する読者の切実な思いに心を打たれた。加古氏は、「事故が起きた原因を検証する一方、原因に頼らない社会に向けて報道に取り組んできた。考えが違っても近づくよう心がけた。原発報道に対しては他社に負けない気概を持って、東京新聞の原発報道姿勢を紹介した。市民の行動や声を紙面で拾うことに努め、読者の共感を得た一方で、1万人以上が参加した昨年6月の大飯原発再稼働抗議

デモに記者が出向かず掲載しなかったことについて、読者から批判が100件以上も寄せられたことを明かした。「現実には追われ、新しい動きに鈍感だった」と反省点も挙げた。「情報は民主主義の血液」。今後もしっかりと調査し、正しい情報を発信していきたい。信頼を得る報道を地道に粘り強く行っていくことで、メディアへの信頼も増すと結んだ。続いて、山田ゼミの研究発表が行われた。昨年の衆院選挙時、争点の一つであった原発問題を朝日、毎日、読売、日本経済、産経、東京の計6紙がどう取り上げたかを調査。項目ごとに集計し、その結果を山田教授に報告して森本直子さん(文芸3)が報告した。最後に山田教授は「原発報道を機に、各紙が自分たちの主張を紙面に出すようになり、新聞報道のあり方に変化が生じた。現在は各紙がバラエティーに富んでいるので、それぞれを見比べ、今後正しい情報の読み方を選ぶ必要がある」と総括した。



▲調査を発表する森本直子さん

東京都および東京2020オリンピック招致委員会と連携協定

専修大学は2月28日、東京都および東京2020オリンピック招致委員会と連携協定を結んだ。



今後、大学、東京都および招致委員会と相互に連携・協力体制を構築することになる。東京都市で行われた締結式には、本学から富山尚徳専修理事があいさつした。

最後の卒業式

専修大学北海道短期大学



▲工藤学長から学位記が授与された

専修大学北海道短期大学の最後の卒業式が2月23日、同キャンパスで行われた。商経社会総合学

「平成24年度商学部長賞」に7組17人

「平成24年度商学部長賞」の表彰式が2月5日、生田キャンパスで催された。同賞は勉学・スポーツ・課外活動を通じ、学内外で顕著な成績を収めた商学部の学生を表彰するもので、今年度は7組17人が学部長賞を、13組41人が学部長奨励賞を受賞した。

【学部長賞】
 第8回日銀グランプリ優秀賞 清水順子ゼミ (吳焱焱・3、佐藤夏実・3) ※本紙509号既報
 第9回神奈川産学チャレンジプログラム最優秀賞 熊倉広志ゼミ(入澤和輝・3) / 山内暁ゼミ(吉田開・3) / 大崎恒次ゼミ(岩田佳子・4) / 大崎ゼミ(太田細・4) ※本紙509号既報
 輝・3 / 小林貴之・3

【学部長奨励賞】
 第9回神奈川産学チャレンジプログラム優秀賞 田清志ゼミ(末永聖和・3) / 高橋義仁ゼミ(前田翔太・3) / 生田目崇ゼミ(片野田佳祐・3) / 渡辺達朗ゼミ(柳田浩明・3) / 熊倉ゼミ(佐藤奈津美・3) / 熊倉ゼミ(石川誠・3) / 碓朋子ゼミ(青島翔・3) / 碓ゼミ(大場龍之介・3) / 大崎ゼミ(迫水奈都子・3) / 山内ゼミ(潮幸典・3) ※本紙509号既報



大学院経済学研究所修士課程 「優秀論文発表会」開く

大学院経済学研究所修士課程の「平成24年度優秀論文発表会」が3月16日、神田キャンパスで開かれ、6人が論文の要旨を発表した。写真。

発表者は次の通り(方策・星野泉)
 △中川裕一(経済学) △国際経済論・大橋英夫(国際経済論) △李春霞(国際経済論) △大橋英夫(租税論) △藤田大紀(租税論) △星野泉

依願退職

【3月31日付】
 生田目宗商学部長(在職10年) 桃尾美佳経済学部長(在職4年)

伊勢原総合グラウンド 照明設備・運動施設が完成



伊勢原体育施設の照明設備工事と加藤茂夫体育部長の設備工事が完成し、3月4日、点灯式が行われた。午後5時、特設テニスの16基の照明が一斉に点灯した。照明がともったテニスコートで村田直ラケット部監督のゴールキックのパフォーマンスがあり、見事ボールが2本のポールの間を飛び越え、参加者から拍手が起った。村田監督は「今までできなかった朝練習と夜間練習ができるようになり、さらにパワーアップを図れます」と語った。

自分の心と相手の心

私は、毎年、正月休暇を利用して、しゃべっていたわけではない。ずいぶん年齢が上がるにつれて、長野県・志賀高原にスキーに出かけている。今年、長野から東京に戻る新幹線の中は、行楽地からの帰路に合わせた乗客が多いせいか、時折人の話声がかかる程度で比較的静かであった。当時の息子は、初めて経験したスキーの余韻が抜け切れないの子どもたちに注意をしないのだから、大人であれば、少し声を抑え、味で話すところを、時折地声で話すとほろけたりする。私は、子供も、「うん、うん、あの子たち」といっていた。ところが、我々から少し離れた席に座っていた男性から「少し静かにしてください」といわれて、自分では大きな問題はないだろうとたしなめられた。自分は大きな問題はないだろうと、相手側からみると、まったく正と応じたが、その直反対に受け取られていることがある。後から、なにやら、という現実を、この件であらためて妙に腹立たしい気持ちになった。「息子(キャンパス・ハラスメント対策室員・佐々木重人)

StoD Campus Harassment
ハラスメントのないキャンパスへ